

## 9章・愛と自由と公正をもとめて: Martin Luther King (1929-68)

— I have a dream. —

### 第1節・(My) first meeting persons who interested me (in a book or something)

キング牧師は、「愛と自由と公正」(\*4)を求めて、公民権運動、<sup>すなわ</sup>即ち、すべての人間が平等になれるようにするために、その生涯をかけた人物として知られ、アメリカではキング牧師の誕生日が祝日となっている(\*6: p206)。

また、キング牧師の名演説「I have a dream」は、日本を始め英語を学ぶ人達の間では、文章(内容及び文体)のみならず、その演説の響き自体から、バイブル的存在となっている。

だが、私にとってのキング牧師との出会いはSchweitzer(シュバイツァー)と異なり、早い時期に、彼が私に大きな衝撃を与えた訳ではない。

これから記すように、徐々にその影響を受けていった。<sup>いな</sup>否、受けつつある。

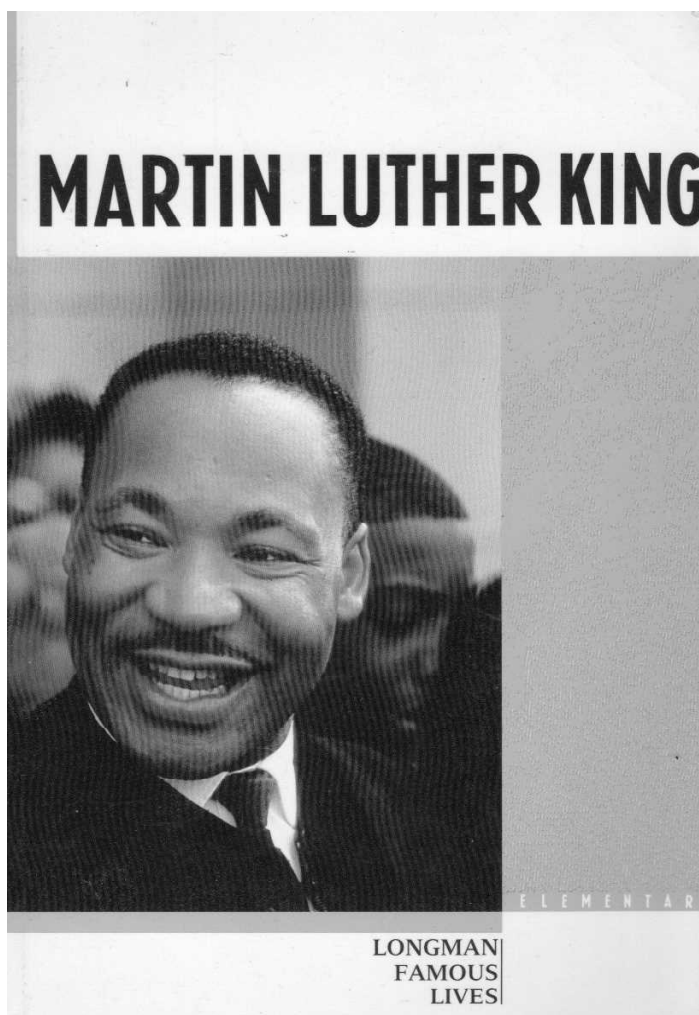
写真→(\*4)所収

#### 《◇-1: キング牧師との出会い》

キング牧師については、中学校のときからその名前を聞いていたように思う。しかし当時はキング牧師のことよりも、アメリカの差別の方に私達中学生の関心はあった。当時の差別は、白人と黒人では食堂・映画館・学校が異なり(特に南部)、バスでも座席について幾つかの取決めがあった。{第2節を参照。差別の全体状況は第4節を参照}。

私たち中学生の関心は、日本人がアメリカ(特に南部)を旅行する際に、トイレなどを使用するときは黒人用を使用しなければならないのではないか、ということにあった。

日本人はアメリカ(特に南部)では黒人に準じて差別されるという、こうした議論をしていた。やがて、高校1年になったときに、キング牧師暗殺のニュースを聞いた。その後、キング牧師は私の頭から遠ざかっていった。再び、キング牧師に関心をもつ



たのは、それから十四年を経て、この短大の教壇にたつ前年のことである。

この短大での初年度の教材を何にするかをいろいろ考えたものの結論が出ず、思い余って文献・資料・情報を求めて東京に行き、三友社という出版社で紹介されたのがキング牧師の「I have a dream」であった。そして、この演説が掲載されていた雑誌（\*6）と演説のテープを購入して、岡山に戻った。そのときに、この「I have a dream」が英語学習者のバイブル的存在となっていることも知った。だがこのときには8章で書きたいきさつからテキストはシュバイツァーの自伝にした。

しかし、短大の教壇に立ち二年目くらいからは、補章-2で書いたように駿台等での超多忙な時期（毎週、大阪・岡山・玉島・美作と通い、しかも政経・英語・（初めて教える教科で私自身が全部を習ったこともない教科の）日本史、それに駿台模試・進研模試作成や監修等）と、そしてそれ以上に支障を来したトラブルにより、精神的肉体的に完全に限界となり、短大の授業は不毛期となり、無の状態となる。

## 《◇-2：私の英語授業の始まり・短大Ⅱ期 [1988～1989]》

やがて、1988年に駿台を退職したことにより、わずかではあるが自分を取り戻し始め、また時間も一定はできたことにより、英語の授業にも本格的に取り組もうと考え始めた。もっとも、本当の意味で本格的に英語の授業に取り組み始めたのは翌1989年からである。このときから英語の授業も求める日々が始まる。ここが、私の英語授業の出発点であった。

この1989年に、授業のテキストにしたのが、キング牧師の「I have a dream」である。それは、前年度、キング牧師をトピックで取り上げたときに、キング牧師の「I have a dream」の演説を改めて聴き、その響きに魅せられたこと、そして同演説テープを入手して以降「I have a dream」に強い憧れを持っていたからである。

日本史も教えていた駿台後半期の頃に、常に日本史をやめて英語を勉強したいし、教えたいと強く感じていた。そのときに若い先生が「I have a dream」を教材に使用していたのを羨望の眼差しで眺めていた。

だから、授業準備の時間ができ、まともな教材を作ろうと考えたときに、まずメイン教材のテキストとしてキング牧師に取り組むことにした。このときには桐原書店の『Martin Luther King, Jr.』（\*4）とテープ、それに私が作成した注入りのオリジナルテキストを使用した。家から学校に行く車中も含め、キング牧師と同じ調子で言えるように、テープに合わせて1ページの読みに4～5時間かけ練習したものである。

この1989年が、英語の授業を求め始めた年であり、そしてその出発点がキング牧師であった。そして、この年度は、野麦の旅からフィールドワーク（Field work）を本格的に教材化しようと思いを始めた年でもある。

さらに、第10章で述べる「チャップリン」の視聴覚教材の作成に着手し始めたり、現在の後期会話教材の一つである「Dorothyと10人の出会い」や「Dumbo」初版を作成し始めたりしたのも、すべてこの年である。だから、1989年が私にとって英語授業の出発点であった。そして、その出発点の最初の教材がKING牧師の「I have a dream」であった。

### 《◇-3：だが、短大での実質的に失われた授業の“場”の中で》

この1989年に授業を求め始めたのは、授業の重要な要素である“時間”が確保できたことと、そしてわずかではあるが“心”が蘇<sup>よみがえ</sup>りつつあったことによる。

では、キング牧師の授業は順調にいったであろうか。

教材は一応整え、英文も悪くなく、毎回予習も十二分に行い、取り組んだにもかかわらず、答えはノーである。

それは、この年の前後から“(授業の)場”がなくなり、大きな一つの限界を抱えていたからである。

一例をあげれば、私はこの1989年にキング牧師と同時に「Snowman」を教材にするつもりでいた。そこで、1988年から89年春にかけてSnowman関係のビデオ・カセット・絵本、簡単な解説、それに楽譜まで入手し、プリントや教材作成の準備に取り組んでいた。そして、89年春までに、それらは全て完成し、後は授業に臨<sup>のぞ</sup>むだけであった。

しかし、Snowmanは、ビデオだけは上映したが、授業としては実施しなかった。いや、できなかった。それは、教材SNOWMANは極めて優しい温かい内容なので、この授業を実施するには、教師と生徒の間での一体感とまではいかななくても、相互の間に温かい思いが不可欠である。だから、当時も金がないにもかかわらず、賃金約一箇月分を費やし、食べ物や飲物を準備した。さらに、2回目の授業での自己紹介時に、それらを食べながら授業をするなど、和やかな雰<sup>なご</sup>囲気を造ることを心がけた。それは「Snowman」の授業のみならずキング牧師の授業にも不可欠なものだったからである。

こうした努力にもかかわらず、この年の生徒は現在の私には理解不可能な行動を取っていた。昔の(第一部で登場した)女子校でもめていたクラス等<sup>など</sup>とも比較もできないくらいひどいものであった。

どのようなであったかを授業で具体的に話すかもしれない。授業の“場”は全く存在していなかった。結局、作成していた「Snowman」のプリントは配布どころか、印刷もせずに今日に至っている。ビデオだけは何回か上映したが、当初の教材を簡略化した簡易版のプリントですら、1994年まで配布しなかった。五年間封印をしていたことになる。

授業としてのSnowmanにいたっては当分しない、というよりはできない。Snowmanのような温かみのある教材の授業は生徒を叱ったり、怒ったりしながらではできない。キング牧師始め他の教材についても同じことはある程度は言える。

授業の“場”のない教壇など、どんなに頑張った所で——特に、授業の重要な要素の一つである“話す”ことは——所詮偽物であり、仮に万うまくいったように見えた所で偶然にすぎず、一つの授業という作品として成り立つものではない。それらは“授業”ではなく“ままごと”にすぎない。授業とは一点の曇りもない真剣勝負だからである。

だが漸く、英語の授業にも専念できる“時間”という条件が備わり、また“心”が蘇りかけていたとき、しかも私には第一部、第二部で述べた昔の授業への苦痛を痛いほど経験していたことや元々授業が生き甲斐であったことなどから、何もしないはずがない。

実際、この年の暮れに病気で入院するまで1日の休みもなく、1日約16時間（政経も含め）授業準備や授業に関係することをしていた。

では、何をしたのか。こうした授業の必要条件の重要な一つである“場”が存在しないときに何ができたのか。それらは10章チャップリンの所で述べることにする。ここでは、短大第Ⅱ期から英語の授業を求め始める日々が始まった（正確には‘始まりかけた’）ことと、そのⅡ期の出発点がキング牧師であったことを述べるにとどめる。

#### 《◇－4：再度、キング牧師の教材化に向けて》

正直に言って、私のキング牧師のプリント及び授業は迫力が出ず、本年省略しようかとも考えていた。他の教材が一部入手できないこともあり、1994年度も掲載したというような消極的なものであった。だが、このプリントを書きながら、冷静に考えると、やはりキング牧師関係は絶対に不可欠な教材だと、今は考えている。

私は、高校のときに部落問題研究部に所属し、各地の研究会やそうした集いに参加していたこと、大学時代は当初婦人問題研究部に所属していたこと、卒業後は第1章で記した西宮市教育委員会嘱託として同和教育関連の仕事に携わっていたこと、そうした日々を思い出すと、何故、キング牧師を省略しようと考えたのかと不思議に思うくらいである。

省略しようと考えた理由は幾つもある。その中でも、大きな理由の一つは、キング牧師関連プリントを使用していた時期は全て授業の“場”が失われていた時期であり、教材が死んでしまっていたのではなからうか。思いすごしかもしれない。

しかし、キング牧師関連教材を生徒にぶつけたときに、少なくとも真剣な“場”があるならば、そのときにうまくいかなかった怒り・悔しさのエネルギーが内容を大きく修正するのを助けるといふより、目に見えぬ力で無理矢理より良き内容へと引っぱっていく。昔の経験からもこれは断定できる。（補章－3参照）。

それが、当時授業の“場”が失われており、本当に失敗かどうかわからず、また失敗しても昔の

ような悔しさなどを全く感じなかった。それが教材を駄目にした。少なくとも私の心を駆り立てるものとはならなかった。

キング牧師も10章のチャップリンも共に私の授業の中で大きな要素を占める授業であるにもかかわらず、また両方ともさほど悪くない教材を入手したにもかかわらず、私自身がそれらを見て今燃え上がるような感情が起こらないのは、やはり当時“授業の場”が失われており、真剣勝負でなかったことが大きな原因ではあるまいか。第一部、第二部と比較すれば余計にそう思う。

しかし、小手先の9章、10章の手直しでは無理である。だから、キング牧師もチャップリンも共にこれから新たな授業を創るつもりで取り組み、私が燃焼できたときに初めて他の教材と同様に私にとっても一つの作品となるであろう。そして、両教材は私の転換点の一つをなすに等しい教材であるが故に、必ず成し遂げねばならない。

今、教育委員会時代（1章参照）を振り返りながら、西宮のアパートの近くで、あらゆることに行き詰まり、よく飲みに行った同和地域内の飲み屋の小父おじさんのことを思い出す。初老かそれに近い年の方で、ほとんど話をしたことはないにもかかわらず、この小父さんの顔を見て安らぎを感じるために通っていた。その温かい顔には人生の苦勞を知り尽くし、正に優しさの年輪が刻まれていた。

同和地域には苦悩している「人を受け入れる」温かさか何かがあるのかもしれない。少なくとも「人にやさしい」何かを感じていた。

都市部落が拡大したのは、いろいろな困難を抱えている人を受け入れる何か（優しさ・温かさ）も一因ではあるまいか。今、原点に戻り、この西宮の小父さんを思いだしながら、この視角からキング牧師の教材化を再検討しようと考えている。

ただし、このような教材を作成したり、これで授業をしたりするには、SNOWMANと同様に、何一つ混じりけのない純粋な“場”が不可欠である。一つの教材を作品にするための年月は定まっていない。ただ、本当の場があればそれを早めるであろうし、少なくとも必ず教材（作品）にしてしまう力を与えることだけは事実である。

※9章では、第4節で黒人差別の経緯と現状を掲載した。また、幼いときに受ける差別はとりわけ厳しいものであるが、その例としてキング牧師が少年時代に受けた差別を第2節に簡単に記した。

## 2018年追記項目

第9章1節キング牧師との出会い→彼ら・彼女らに何を求めるか。

第9章2節キング牧師に関する資料→動画と暗殺に関する資料を追記。

第9章3節キング牧師の言葉→動画

第9章4節キング牧師に関する更なる情報→従来の奴隷制度の歴史に加えて、スキャンダルと民主主義を論ずる。

第9章1節追記→HPに掲載した期間中に、一部分修正し、修正後にPDFに添付する。